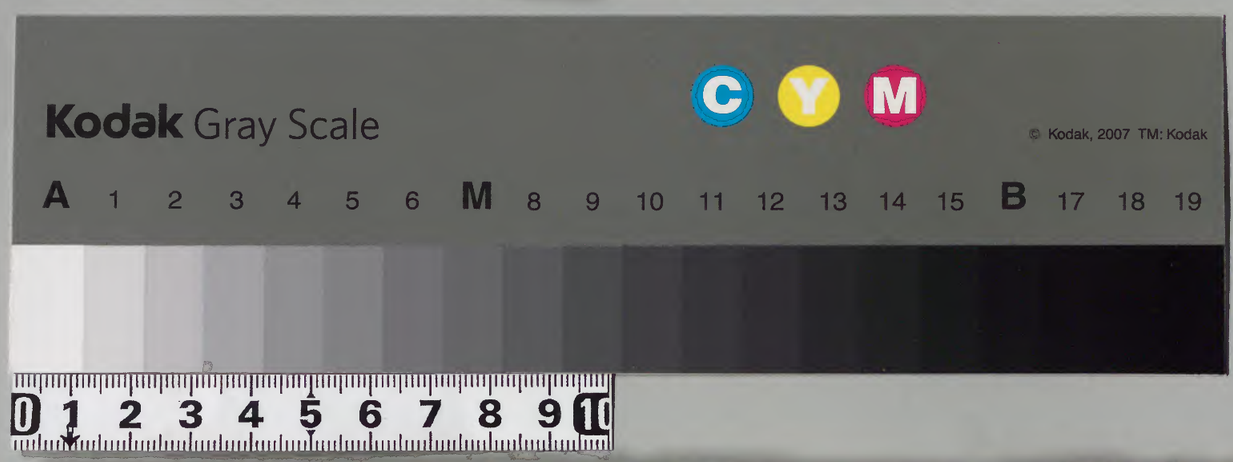
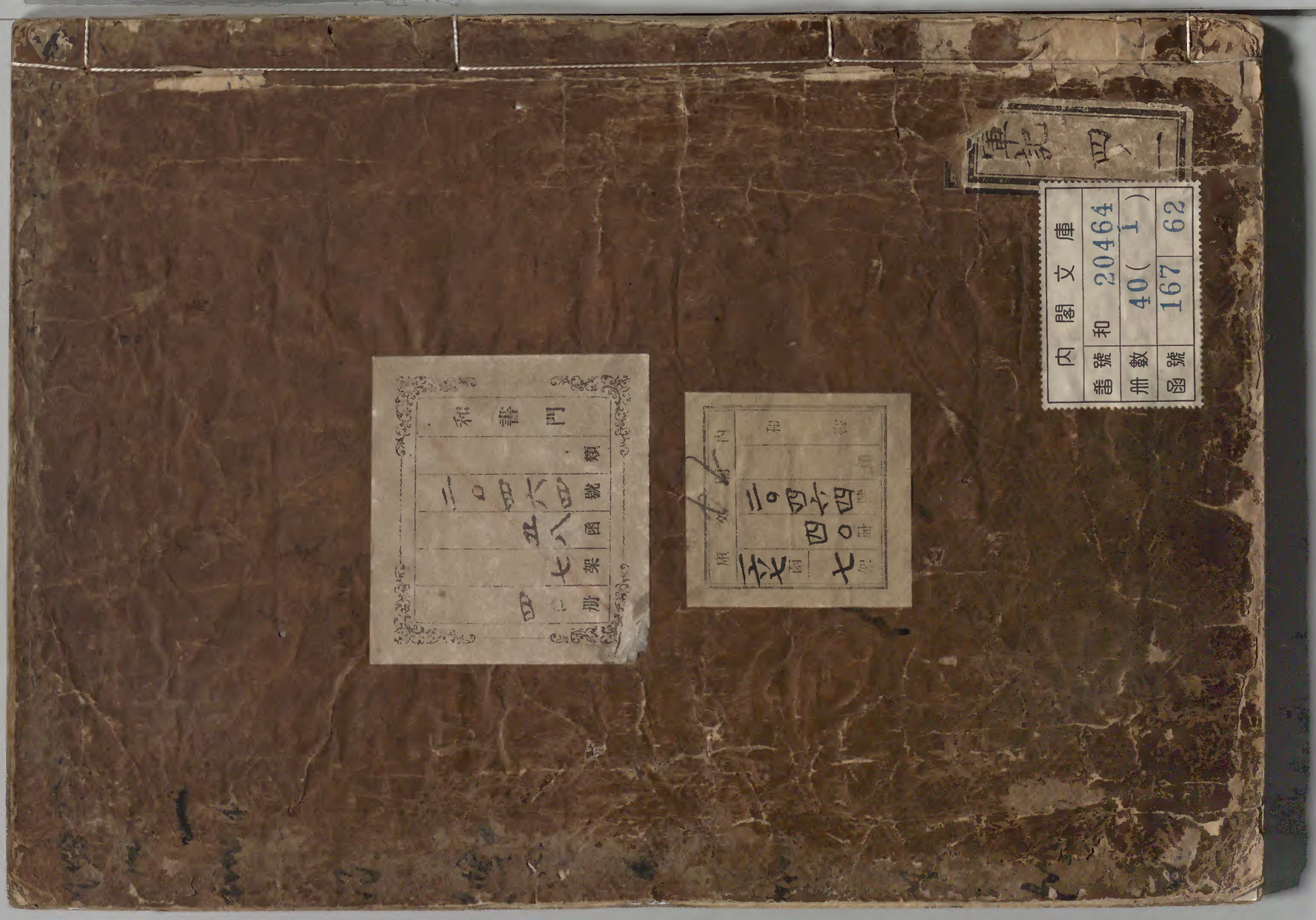
国立公文書館
National Archives of Japan





国立公文書館
National Archives of Japan

太平記巻第一目録

東京帝国大学図書館

内閣文庫

町田久成献納之章

持明院殿(ジミヤウインドノ)ヲ宮内治部(クナイヂブ)ノ卿ノ事 付武家(ブケ)繁昌(シゲウ)ノ事

関東(クワントウ)ヲチヤウブノ事

三位(サンヰ)ノ中将(チウジヤウ)ノ事 付三位殿(サンヰどの)ノ御子孫(ゴシソン)ノ事

中宮(チウグウ)ノ御産(ゴサン)ノ事

主上(シュジヤウ)ノ御(ゴ)ノ事 付玄恵法印(ゲエホウイン)文談(ブンダン)ノ事

ヨウ[illegible]ウ忠(チウ)ノ事

資朝(スケトモ)卿(キヤウ)俗(ゾク)ニ成(ナシ)給(タマフ)ノ事 付法眼(ホウゲン)岩文(カラフミ)ノ事

内閣文庫

太平記巻第一

序

夫ひそうかこの古今のあんらく城としてあんきの
来由を尋ねるに昔かきい天乃涌也的
君臣の道によりて国家をたもつ
事をうる紀之地のたるり良佐こまるよりの門として
ちやちやく城ちりそまを涌うくるとれい
位ありといへたをもつすいとゆう蔓の樂いるん
ちうかりりを緩乃紂いがくやうをいをを乃
なごふとれハ敵ありとをも久うをすうく

をく鑑ものいうんやうふけいし禄山ものうもの
ふほろびー事をあらをとりてお宝ばくをもく
てはとわ業をーうるる武えんやあうえん
うりえていまのめを既滅ふとうさらんや

御大願天宣治世事付武家繁昌の
ものふ小平物のんもうのもうめざんむを宣より
九十代代のみをくごだいごの天宣より世学を
尚てぶもんはうくの加く平の富財とりふものの
ものり代財うく者の渡るをむさもたれ礼を
うーるふ事ふをて世海大よみられて一日を
いまをを屋をうくらうもんを天をうをめけいを
地をうごかを事いまふ形く世十余年一人と
もて長秋ふとあるるをを地をぢんえんを是を
をくふ西るーばうくをらんものう武方ものう

ふあくわさりひ一名一夕乃ゆへよあらすぎん
ほやく年中ふかまよくらの右大ねうもとも北
さやう平家とはいうちくをこうあり一村
ごちくふの乃ぬんえいうんのあまりよ六十六ケ
國乃そうはいふ一ふあせらるもしりぶけすし
めて法國よちゆごをよてしやうえんふ地以を
をくうのよもとをのちやうをんたまつれうく
よもいふおるん右大ほさ称ともこうねはのて
うかせいい将軍乃武将ふそかりうあまを三代
将軍とかうを称る城よもいふのさやうハさ

ともの乃うあふうまさ称ともいよもいふのこ
あくぜんどうさやうがあふうれくを
子三代ほ乃ふ八十二年ふちくはきあ毛後
よもともの乃さやうのちうとと城うえれかく
平乃時政がおそくさきのひ月れうくよりとれ
おぜんよてを下乃きんをいをとりいさかひ屋う
やくはふふかりんとすは村乃大上を宣ハは
ちはいはん武威下ふあるりくてうきんよふちく
きん事城るけき田石てしう村をかりがさん
と志ひ一ふ弱久のらんが案てを下ちらく

を考へうるに法師小せいさ日小うをめて字
治物語よりくあひあくうふをうくうひいまさ
一日をを人さうふくうんぐんぐんちちまちよをい
かくせうけ侍多賜院ををきの國へうれされ
させ法ひくくようをさいよくハくうくう城うか
あくあよあきうそきをうりな武蔵国屋を財産理
乃まけとれうぐむさうの乃うくくはの時はくくよ
くくとれうをたるの檀のうくく時宗さうくくはく
さぐく財おはるて七代まうわりじく武蔵のうり出く
流をうくうんをぶをうくうくまうり威万人の上小
かうり梅うくとり人を法師思乃あひとをうくくんを
小石てぎんあんをかくくうくものきをせめくく礼
義をぐすうくく城りて富ーくとりをあやう
うくすくをうくとり人をあるさす弱久うりあくさ
ちよりうせけ乃昌小理世あんうんのをかね
あくうり法竜うさぞく城一人かまうくへりたし
生をせいい将軍とあ城ひくくぶをん皆をいをう
乃礼を事くすり同三年ーかをーめて海中よ
あ人の一ぞく城を忘てあをくくうとうをくを
國乃さく城をうをこるりはせ承久のけい忘り

そもへらるゝ永仁元年ごろ
ようちんせいぶ一人の
ようせいだいをたてさせ
られ別のせいをかくすされ
ばあいぞくもうらいのまゐりをかくすされ
ば一をゝあまりくはゝ和よもさがりとり
ふ
而をゝくはゝのかもひとり皇をまんせいり
ゝくせいとりふをのもなるもをり釣陽をろさ
れともざんせいひうりとうぐりとるひ
なを武家ようゝ公家をさうゝ
をいるはまとも而ゝまん地ゝつゝくもゝやう
けもよりく國ゝはもゆごをりくもてゝくしい

かゝゝしゝゆへゝよてうてい治年こゝ小地ろへ
蒙い日ゝ小さかんせあまをよゝて代くゝ北朝道
ゝ成くい朝久乃もんをんをめんがゝあち
かくい釣議のまうをいをるけを地りゝめて
ゝういをかゝはさゝやをはゝよえいまゝをめ
ゝうされしうゝをあうひいいさかひむ小もく
うるゝ成い朝いまゝ和ゝをもくりくし治ひ
をゝ南ゝゝ北まゝ九代のこうめんおゝはちく
ゝうゝ平の高朝へ乃そうかんが代ゝ新く天地
めいをはゝうゝむをきゝあゝ小あゝいをゝう

はるく古を引て今を乃ぶ
うらくして人のあざけりをうるに足る
あくしうに志て武乃法のえを思ひ
小遣銭を事と志くぜんを地下ふ志
めの勘蔵よ戌亥門をそあそひ
おふいくさんと寸湯乃熱ひ
志ゝゝやくつき蔡の雲形が
今ゝ来るんと寸うう人
うう紙ひ多ゝ紙時乃みゝごだいご
乃て宣と申せゝ多法字多境の弟二れ宣子演天

門院乃法ゝゝめくれもせ
ゝうらひと志く法年三十一の時法ゝ法け
年ゝ法年乃周内よ法三かゝ永常の紙をゝ
志ゝして関孔子のゝうよ志ゝうひれ
横百貫のまゝりゝくをゝ世法ゝ遣ゝ
屋乃あゝ紙をゝき志ゝ法ゝ
しひぶんゝん法よ志くゝのゝ
乃のゝきゝゝう紙をゝ一事れ
せられ志ゝ法る社ぜんよ
時を法きんゝれしあたゝれ

を建せり微小天ようけうう新田地よりうせう
めいうんうりとを酒をせうじゅうその紀よりこ
らわをのいなりをり
開田ちやうじゅの事
そをまはそやうせうの開田れを大さんをさう
ちめ財の恒常をいまし一めんがうめ地郷うふ
今ろうじんの利ふそしやうこ注米の陸りえ
年貢うんそうの牧ありとそて大津くずいはれかい
米田こうのめいせれをやめらかゑぎんうう元禄
の夜大うん地をうこそて開拓のうう百里れ開

ひるしくせさとのこうそせいどうりがへう
野ふうして飢人地よたをうれ年貢三百をそて
繁一ぜ城うふ者ちうふてかれきそんをやな
て賑ふ酒ゆうしう天ほを一人をたをとべしまい
うん何れとがうそうひわきりひりあ人をと
ううてい酒の天うそむをる事況なけき
田ていれうきのぐごをやめられて飢人をう
うんのせぞやうふ引きをうこそありうさけき
ほを元禄万民のうう人を夜すくるきうあうす
そそけひいしれ別尚ふれりせて米財ふゆう

乃ともがら利だいのあるたくりんはあ
かゐいうく城てんきんもちく二条町ふうりゐと
さてられきんしうりうとくりてあゐい
を立めてうせらかさまはしやうもいともよ
利をはくしんかゐ九年乃しくりんあうこと
そせうの人繁木の附りとはれ情上ふを立せさう
事をやあらんとて紀綱正へ書はゐく盗ふ術
をやたあくめ理地をきりどんせうきちは
慶蔵の術ふちまちうりやうてをいあんもうち
てかんこをうり人なうりうり漁よ理世あん

うんのまうりどくり撃げうり付てあきを
乃まは食世あせいのさいともせうどはへて
あくうむらくい謀霸城をこるひ我人らを
つとしふえいまよかきあうう事をえい
利さうくい一天をあしすとりんはしもぶんを
三さいをこくさうゆんうり
乃あうり乃事付三位後はつか称はる
文保二年八月三日板西国右大臣大臣さう称うあ
右乃はひとあこうひれくりはふそをんくこう
さでんふりうせはよびゐうり女はをてられ

ようの事をぞかの代こまを取久ゝはたらくに
かゝる代くゝ面園寺乃いろをそんそうせうは一
家はれんしやうあくうをてかれ再目流れるる
うせう衣を閑東乃やうく姿ゝと思てとり
わさ事にうれはさまをうすやはよりひ
をそかに二八よちくそうんをいしやうはをとり
かしはちきてぞうくろうでんの内ま入給へを
ようたう乃表流いくめるすそうひをい事はれ
風をくめうはゝうちりうじやうせいしを面
流ちらかうじめせいをんをかゝんを知りる給

なまは表乃はなりくを定めてうひはゝしと
なりくしかうんなん兼ちうまうをうちはは
一生むるくぞうくがんよちうはゝせ給ひ
源実乃中小四くを表の目はれうれ事を
るけき秋の萩はちきうんまは世給ふ食
なかんくちくかうしるおりとり大はは
ゐきまそむきうけんうかをきくてせう
くゝうゝうきゐのまく流うにを猫しゝか
ゝかはるゝを流そふなるゝちとるまり人生
まく梅人乃ゐとるうを事るうを百年は若か

他人ふうとは白紙天ゞ書ちらしを習ひなりと
見えそうをはあ野乃中ねをんゞれむとあ
り之はあ乃つか孫とゆきをう女家中一文のは
うこゝはいまきをうを表一家はらんせうまて他
ふしくるうは見えありこ子のてうあひい一月
よるをうは六文のゑんあいをゞんをうくるさ
ゞこくるうとゞく三更人九郎廿七の世板
八十一乃女はをゝひうをうれ長人ゞふのゞ
ゆよとゝはをゝ子こめんのはんをはけられすに
しゆえんゆうこのひうをうを殺をのゞ

ふあゝすをゞ善坊ゞんゑいしふさき
ゝく戌をあゝをひをうは花乃下れ表のあをひ
月乃おの秋れえん雪をれいてうを殺をよし
華をまれ屏を考ふし殺ふを見うを王殺まうり
ゞくを出殺りはをうちよゞゝれ蓋剪を
下されをうは人ゝか貧居ぎんひの田をなせり
ゆをゝをゝをうをうのゝめて門戸をり
るまる事殺はとれてを下れ人男をゝむ事を
りゝくをゝ女をゝむ事殺をりくせりさ度
はおゝひ屋ゝちやうざれその出さを也もし

こうの山にへとぶかいひくけきしと上きいを忠
ゆ紀年貴をあさへ業行を擢あるを脆とせり
こうん志よいよの志ていんせにあきえそ
屋ぶらす猶人とりてあうひの塗とすいくせん
きいせいけいこくれ記今まありぬとあるて
濃まかりしるゆともも也

ちようもう乃山事

志うしの紀をこまいまて宣后きんひれかうん
ゆんりゆこ家女こるいりぐ出かうりけきい
実こ次第よはうん志やうこて十六人まそそゆし

しきこう中ゆを第一乃実当る親王はこひぐり
乃大納云為世のさやうれひとゆ懸坂三位為子
のはこゆくゆしせ殘より用れ内大臣宣房
乙屋うこん小志皇り志こけ志こくの嚴れこ
めより六義乃こうりうちやうぐさせ猶人里
さ連度ここのを河の清さなきをこく淺番山
乃ゆこさ紀をゆこてせうゆうこ門はん
を屋ぶらゆあ猶ふ弟二の実を同はこうまそぞ
ゆうきをうあげまれの山はゆうり妙法院の門跡
りはゆ志門こそしやくしのをうをけさせ

[illegible]ゆゑ三ヶの間よりあらはれ出
りてあるひあり出るは加りそ大師のそうげう
ふをとゞすおちん和尚のようがふをこゝろ
第三乃文ハ武戸口三位殿のはなしを也はようち
乃時より利うんそうめいよりもせるはなは
そゝ井をはゞ出文よりそと思ふ出るは治
世の大乱ゝ殿と指的流殿とうりくりをせ
給ふ事とゞさが乃ゆんは時より定められ
出るは今殿乃とうゞをと指的流殿は方よ
りてまいゝせらるるを下乃事小大とうく関東

乃ようらひとしてえいはるふを仕せられるは
出るは出元祐の義をあるゝあられるをよは
門跡よは小出るを親王の出門弟と成せ
給ひく一をやてすをさるはさるやう世よ又
ゝひをなるゝ出るは一ぎ門ゝんどんの起は
すひををいくの風ふんゞ三ゝそく
せの時は出るゝ成ぎるくせんは流をよひさせり
ゝをはゞそくあんとすゝうとゝ成かけたく
あんとすゝ出ゝやうを法ゞん事ゝ出門
乃は時すゝへと一山ゝかゝゝを合せくゝゝ

しひ丸法眼をとこしめけてあ弥ぎ第う寿四郎家
を同ほうしゅくぞ坊うしきを乞い志やうごゆん
の二りん親王よしはふてい内ゆくゆくせーうは法
多弥三井乃るきをーくく歳月をおそんの
ありつきゆ初し法ゆ山かちよんちよりよし
えーひちくえんせうていのそゆへ滅よ王きう
さいこうのうんゆくそ古久のりとひとれを法
うりとぞ思くうちをう
中良はさんは彩乃寿付後慕偽給者ゆ
ぎんうう二年乃春の法りゆ中良らといゆん

乃はいのりとて法る法山の僧富僧ゆ作く
拾くよ大法ひりう弥をこまりせらゆ中ゆを
法縁ち乃ちんらちん上人小野のりんらん僧
ゆ二人ち別勅と頼くそんきんよどんをうきん
ぞうくゆいふちうつさきそかんさんをくぞさ
てぞいのうきをう佛願そんゆ月ん乃法一
字文ゆんくしやくさやう七佛やくし志じやう
くうううとさまゆんぎやうるんしれ法文大こ
くうざう六くちんゆん六字うゆんかりていも
八字えんじゆふぎん色金うんどうどーよ

はごまのきりいきのいえんようちんきいの
こゑいきさでんすに到ぐきていうるあくま
ぶんまやうるりとをきやうげをすぐうとぞ
ひんこうりきうかやうかこうをはこ月をかうの
てはいのりの精滅をはくされけきた三年まて
うりてはさんのはきいなるうきりはかあ
をゑきこ関東てうかくのうあよ事を中京の
はさんりよせてうやうかひりを控せられ
きうと也をかくの者事を思立るなきた
法院のいきんをうひうく思けきた事

あやふかなこく戦よをきゆう事やあらん
ときかり思はされきう間源頼朝紀の老たきん
おの人くゆをかせ合らるりをすに月
野の中納言資賜義人のおかけとをは乗し
中納言たりをけいんの大納言りうこ平宰相
りをけこうりうひそうかかせ合られて
さりゆをきに兵をはききうよりこうの判官代
よをひくあをけ次郎重成おくきいのしも
とかく勅宣よりうきくこうりはは後裏いるいう
のじゆげう武はのそさいくゆうちやうなり

きうけ きんきうくふを官らんさい
ふあり きよく織るを けさくまり郷の同書
仕事 きげく きくちうさく小原るうきを
いうゆを きて きうく 彩者 してむりんのけい
ゆやく 城めくうさんと思いまけう 愛よ 山門よ
河乃きゆとそう 妙をさうけてきんていよ 祈る
事ありとりりくはそう 妙をひうきてよくや
されきうげよりんあやまりうていゆく 楊激流
を 激流 とそうのきうけう 度中 れ 流心 を
やて 目 城 合せく 桐乃 字 をけるんふ 付て を 作り

り付くをりくとうそよむ色うりきうとうか
ちうをうらてぞうきうりきう後 墓 大 りうぢ
うう氣 多ゆく 面 をあうめて 巨 ふ をきうちち
きうくふあひ 彩者 をとひうきて 事 年 きうり
ふ仕をやめ山伏乃うきうふりかへてやまく
かうちふ行て 激湍 ようるわ色き 西く 城 見 をき
来 国 西 国 まりて 国 のうきよく人 ぶんぎん
をそうひ見られきうる
礼うう乃事 付 玄 亥 文 後 のう
あふ長 法 国 の 伯 人 とれ れうきす 命 より 色 さく

あづま路にくだりて国ながしといふものありけるを清和
源氏のこうのゐんとおぼしくぶしようにやさしかりけ
る資朝の御くれたんを為くにかたちうつくしきを
ゆうゆうのまゐりたまひてぞ深くさらけきけ
ゐまきの一大事をたゞ右ゐくにたんの事ハ
いくあるべきんと思いまきれて物もよくく
をんとうくひたんゐあ和主礼うとりよ事
をぞたゞめられまうを人数ようりんの大納言
をうくに宗中納言をうけとうゐんたまつ
のかくに実世為人おかべとくもくそのこ位房
ゆうしやうごゐんちやうの法眼ぎんむあとけ
次郎重成あづま路にくだりて国ながしあるとその事
ゐうゐんの弁尼中原に再目成ゐうせりり
まんもいの次男上下をいいくに男ハ出りをぬ
きて部をとるもちぎ師のもをきをきて白
衣よなり年十七八なる女よしゐあくうゆうよ
ちぐへくしゐ清らうるうを二十余人まくしれ
ひとへくちらををせてしやくをとくせをきて
雪のちぐへ衣をて衣をきよしふようあう
うゐあをおしくうゐくしくあ山海の孫猫を

はくし出しもじげこれとくてうくてゑく
あそひたい ゆきまひうくを用まは共とうい
をほろかすゑきくをもそのかい他るすを
事くとうくはもよくをいをうせを人のゆりひ
とがむう事をやわらんとそるす漢文漢ふよ
ぜんがくあよをはさいいくを双のやくをけう
玄道はゆとりふ文をしやうきくしやうきい
ぶんぎうの演義をぞをこなりせをうのは中
むりんのくをそとい義ゆを出すす舎合の用
じくふ廣よのぞうて玄をぶんし環をとうねね

ぶんぎうの中ふ出やうきいてうきうよをも
むくとりふ古篇ありふ敵ふ部く演義をや人く
ゑうかふ古の書るりくごしそんしるくたう
さんるやくるんとこそ部うゑを南用の文るき
とて出やうきいぶんぎうの演義をやめてをり
ふうんしやうきいとやい唐のをゑよ部く文
ゆうちやうの人るりくう酒ばとしみるさい
くふくこ城るう邑ゆんを出やうきかんぎ出ん
そうの用よをふ出ゆけをり出やうきいがゆうし
かんしやうとりふをのありゑい文字をもう

ますゝ猶番ゆをこれさりゝを以乃士れじの川
をまあんて主為をきわさとゝ主事一城すと
す城附しやうきいうんきやう小向くゝけうい
あんぢを地乃中一小紀生きくく仁義のかよせう
ようすを志子のこぢる家小人れ当とする家也
我常小ゐんぢがゝあ小を志とうるきむ事一切也
とをうゝんしをれもうんきやう大よあざゝゝひ
て仁義い大乃のをゝきゝうゝ家よおて学業ハ大
偽乃ゆこか附よさうんゐんりをき主為のさうひ
小ゆうくきて志紀乃かよ自分をさまけきん

さいのひぢをさきてこちうゝ小を地をかくし遠
紀の城ぢうぢふて橋程よゝ山川をそぐ川ゆく
うゐきむらくゐゝの人れそくをゐめて
ひゐゝく一生城匿ゝれ中一小あやまゝ事を
とこうゝをきけきやうきいかきゐていくゐん
ぢがりよ西我いゝこ伝せ今別遠紀乃ゐをを
うぢふ事をねてんやことふりかんしやう
こゝよかゐゐくきておりをきゝゐりれ
ぢんをおうんふをてやうそゝ引あ城のけゝう
をんをけうちゝ小ゐをきぢくれがゝんの紀

のぜんきんしゅう一枝あり春やうきい井ちろそて
ゐまを乃ろ小花中よ食字小書ゐ一まんの句
ゐり雲ちんきいよまこありて家ゐ〆きゐう
あらん雪ちんちんをようちくるすまんと
ちくしやうきいふーぎれ田をすーて色をよ見
て一嘗之嘆すう小句乃ゆうみ者伝るう弾せい
のこゐそをもむき落葉の窓を知がーを小
ゐくこまをうんとを仕ちん〆ぜんとちくそく
うせれもりちくこそかんちんいせんじの川
乃乃を拾うちんてれ人よちうきけきを後
ゐうきい仏法を仏よ見てしじのをうをちんむ
ゐきゆそう性をきりをうとぶ小ててう春
へ流さう日ちれるゐづこてぜんと頼と成し
ちうう小古心乃方をうりゐきんきい小
雲ちこありて来川ちん方を見こをいんで
ぜんちんのさうちきよのがらんとをれをちん
ちんよ雪ちうて行ゐきを忘の乃ます者を見
あゐ見をうるひく鶯をめちうす敷よゐく
より来きちとをすくうん春やうりぜんとちく
くいう小ありしやうきいちろひてるより

ゆりかんしやうが袖をひきてうちさはぬ中ゆゑ
きうゐ先年をきぞうくの花の中よりたちうしし
一きんの匂いをんぢ我よりあらうぢめ左せんよ
うきへとつげさうせうの也今又をんぢうゝ小袖
きうちうきうわ我作ゆゑ偏屓ふうきへ花
をそゆうゝ成はしとあ舎利をくをきく巻列と
小ゆりあふうをきゝてたくむやとておの一
きんよ匂を作ゆそ八匂一首とすゝてうん寄やう
小あうふ

一封的憂九建天　夕賊洲陽路八子

歌為爲的除鄰夏　豈拾裏打昭沙年
雲撰秦辰家何生　雪擢藍開弓五前
和汝巷東頭肯宗　好收君骨瘦江邊
うん寄ゆう山詩を袖よ入てくゝ東西よりう
きふゝう微ゆうゝうゆうみちゆんの面およ巻をゆう
されとりふ事成山漢義を中きうんくれりゝ
男ひきうゝをとうゝうゆきゝ
ゝ重かとうゆうゆ忠の事
むかん人のよたうと紀のたを義人ゝ重うきハ
六ゝうれ生沙新筥左南ゝ清ゝ射ゝゝゆさうむ

をあと様ちくさいあひしらりけうが世中をそ
ふみうれく合戦繁なるよ一えうち死せば
といふるのあるまーと思ひきう間しもく名誉
やはーかりきん成敗乃稲穂よ一樹し
うけふ宿り同源きをとくむもうかえ生れえん
濃うしいうんやおるまきまきとでふ三とせよ
あまきちる成さうるうわあろさーの稲を代氣
炎ふけはりよふきてをはりひうり給ふらん
さてもさるれ者人間乃うーひわあふ中の契り
なきに今りー我ちうくなりわどうく給ふ

事ーのうーなうらん辺をもてい女れんをう
なりで我は世をとひ給へ人間よ後らを二ひ
丈夫乃契り成ひとひ濃土ふ生きて同うちをれ
うてふふ事度をとりけて給ふーとを事とうく
かきくれるうこを流くぞけう女ばくく
とやてあやーや何ふ世れ給ふぞ的月まれ
契り乃稲をちうれ世ふは世までのあう海い
忘きんとて乃情もてうそ給ふめうでを明う
ふーを見ますとうさうんくとひきを片男い
ん濃くちくさきに度よ我ふーよの物食と夢く忘

小形まれ者の風おすうかをるくちくはじかん
よくしめうるるよ一をいのちれいきんすう
事ーこーめらきるくあるる箱よを付ようき
つうるしさかくかやうかりもいく事ある
かーこ人よ者こさせ治よあふをこくくくはをぞ
かくめきうは女性人乃さう変ものりけき
しはくかきてはくくくと事我男ふよ者
乃はひんるきこくを者形こう男こちちかふ
様せこるへーりよ戒めかるびをしりちん
るいきういい一人も祈うるきさこるあき我文

こゆさかを治くたを義人をうりを乃ものよ
るを光ををあけちん男いをもたけちやと
思ひて恵文ゲもくかを行志のびやうかひるを
はりのまくかぞ治りきう新箱大かるこるさや
こたを義人をよびよせかくふーぎを彩る微
ゆくはやらん今の世かかやうよ事男ひくと
こて治りんをひくへよ石どいざこてふちよ入
をのゆくはをーり他人乃はりをきよく我
かよ動こを変こる様せこるかるきゆくはへくと
ゆき恵は道のつげきこせこう世を六こう後か

ゆてはかをとゞ成のゞきんと思ふいくさの
らひ給ふぞことひきれる兵箱の一大事を女
性よりもとり箱のんゆくすゝうけぞやうてん
せさうあきさい事ハ同名しるをさぞあ治見宮御
ゆうがすめをして同意仕くはしとをくく
もかのとゞ成すうやうかはさらひゆく
とぞゆけう新いまさはさうゝ新箱いそぎ六
さへ来く事ノ子細を聞はけゆきを月別時
をかへをかまくへさやるを京中海外
ノ武士をを六さへ石あはめて先ちやくう

をぞ付られきうを江漢ノ国ゞずいとりよ西よ
地下人代官をそむきて合戦よりふるあり
中西ノ方門前を六さうのさとちく左家小
去ををんゝあかは十八ケ西のゞ申寿よ出来人
をりかさ宮中をひろうせさ宮兵いひん
ノともゞゞを出くさゝがゞあれさうしも也
を兵元を治見も我分のうゝとを田ひをよゞす
ノ日さゞをりへむうふをき用意ちく皆をのき
う宿西ノ方ゞ居さうきうさう箱よノ来元酒元
年九月十九日ノ卯の刻よ軍勢うんのしく

小六ろうへもせ兼をうしの三郎左衛門射のり
ゆき山りとれ郎とれつるはをんのちをを結て
討まの大わを弱く六兼河の原へ打おとす余勢を
二ま小ろけて西治見が富田小路たろ
うとれ十郎う富田三兼河へよせけうり射
縅かくてをいう物大事はてきを打りしれ
と思ひをうるや大せいをけりて三兼河原よ
勇くとさけるに一騎中一間二人よ出力りをせ
て来ひやう小とれが富田へをせて切門およる
をけのう樫て小門ろう内へはをへる中門の方

とをはまけるの井出をう着しとを覚てはをうら
力樫よりちし言いびきかさて称りうり
みまやのうしろをめうりてげくようくけ地
のあうと見まけうしろは当はい地ゆく門より
かいうちををーさてをんやをしと思くをやく
でんの奥ろう二ろをさんとろと引あけうきとれ
十郎に今物きあげりうりと覚て新んのうく
を出であげてゆひをうがしもく九郎ををんと
えてんをうちといふまるく小立ろう苦力をとり
あうりるうしやうし城一間ふを厚ぶ五六間の

家屋へ切ぐり出くてんじやうかたかをおはけ
ぶとくちひきりめぞ切つるい縄
縄をひろ庭へ出ひ度おかしをれまえあらもいけ
とらんとあろさして折ちひくいちりぞき打
ながきくいとひのき人ませもせはくうひて
うろをきつと見さうきを根の大勝二ふ余強
二乃門ちうこ入く同者ふ附を作ちと紀十命
久く戦ていゆ中くいけちきんとやはひ
きんかの祢西へち里ゆ地てちう十文字ふかき
切て小枕よしそふーうちけう中ふ同ふ祢ちう

きうちたうたを思ひしく小うち紀してのが
ちうきの一人もるうちう首とおくきうさき
小ちうわきて山ぶ九南い色ちう六ちへちを
寄ち毒治見が富西へちをちーこ命ちまつのう
ゆきをさ紀とちく三ふ余強して出ーふせちう
毒治見い秋もすぐちう酒ふのこ毒ひてお枝を
ちうちをふーうけうが財ちう毒ふちうきて
ま迷い何事そとあうてさうぐあうちふふー
きうゆうちん指ちまきうち女ちうきを月枕ちう
ちうひおくれきせふ出ちひつふくちあさせて殺

孫りうう者ともをぞ出ぬこしをう小笠原孫六
けいせいが出てろうされくたかちをうて
中門ふちゑ出ずく目をちりくは方をきんと
見きれちうあの口のちさ一流きたい地より上
より見くうう孫六内へへくく六ちうより打をよし
向くいけうけ月のはひかんちやおうつきうう
ごはりくいちやあ面こ志力めぬきのこうをん
箱を切合てちう試されとよだりてちうまれ
ゑくかくふるげうけ世はさしうあるぐ井と
ぎげとうのらとをひさげて門の上ちうやぐう

へちう里あぐり中さうゑくれ打ぢひさまよし板
八文字ふひうきてあうしくしの大せいや
我ふがぢぐうの箱しそのうりきうき柳討をの
大れを雅と中人の向りきていやらんを付て矢
一うけてはらんいへとりふまり小十二束三伏
京ちうちうり引ちりて切くるり円まうれよ
ちうを見ちう猪野の下野おの見がりうう小きれ
ぐりの舶房がりぐのまうちうち法けの板を
矢さきちうくいと紙ちくるりさうぢよい
れうすを見をちあとしてうひの袖菓搦うを

のちたいまさすさはあて男ふ物はいきうか
面は立ちう兵二十は人矢はれたかか射て射ちす今
一ちら屋るぐ井は部ちう矢をわきてやるぐ井
とけやぐちの下へうう足とるげ射ちう公矢一
流もめいどの物の用ふは物へとひひちう
かさ一日中一のうう者むりんかちし自害
すうあり物足をきて人はうまと富貴かはで
りて左力のきうさ紀をはかくりへやうう
うちうさう歳はとび射ちてつうわきてしそ
死かはきは間はあ治足をきめとちく一ぞく

ちうたう二十余人相をひしくとかくめ大変
かはどり射く門のちうんの木をさて結けう
うはせまうんうのこしとりん出思切しう
者ぢが死ちうひをせんとり引ありうちうがこい
さかは内へ切くいらんとすうをのもなうきう
敵小伊筑豊治ちう父子兄弟は人門のとびらはお
開ぶきうう雨ちうちふて内へぞへうきうん
さうの箱いうけきれ出ちうけうう鎧の中へ
ちふてへうちうのなきて出てきはおちがつうもも
ちくて皆門の足紀はちくうまかうはせ出

をたそいよくちうはくをうりきう門
より門へとびらをおしひらきて討手を取箱の
人うちのさうくをたんくられはものうるちや
もへは入りへ我ホうびとも引かはしまいう
ちんとちぢまめてこそ立うけきゝ手とも歌
ふあくをあざむうきく先陳の百余人ものり
はるをくうちうふりおめきて遊へこゝへ入
とそこをうの兵はとてものゞきしと思ひ切
あう事うきしゞくへう一足を引をき二十
余人の者共大勝ち中へみれへく面をふうをを

切くまりうされもせの者の百余人ゝ小切
そられて門よりかへさんとひくはまたよせ
手ハ大勝うきと先陳ひけを二陳ハめきてうけ
へうけいきをひいゞすをひおせゞうけりう
辰の刻のもしあうり午の刻ハをりを大勝
かくこそあくうひけきかやうハ大手のいりさ
つよをきをけく木判官うをのをの余人う
ろへまりてあーさの小路うり出家をおかぶ
ひてみうきへ為君今いをもまてとや思ひきん
中門ふるをかて二十二人の者共あうひよさう

ちゞんさうちゞん銭をちらせうしてかうけの
をよめの家をたゞ門をあけずりをうを用ようし
めてのせいたみられへ前をあくたちへなを
ゆう二附ちられ合戦よりあひ死人をうぞう
小二百七十三人なり
賀勢後藤岡来下向の事付は若文のる
と紀あ治見うれくはなは来のはむりん次第
かくきなうけきて来使伝蔵写郎左衛門義光
南象次郎左衛門宗重二人上洛して文月十日貿
勢後藤人をめしとりまうと紀がうまし附

いけとりの者一人をなすうちたは白状をよ
あうじさうたは我ホが事ハはうりきおとちう
る紀勢よ池勢ちくうりうを用意もるうりけき
て素子来西よりあげ南のひて分をかくさんする
小西ちく賊賀い大語よひさちうされくるの
蓋とるりホうりは賀勢はは吉野の一門ゆく滅
大理を理宮中納云よ郎りちうは君のは光くを
地ホしくよちく家のうちんしやう附をはうさ
後裔勢たい分儒雅の下より安くのぞみ勲業の
上よ業せうは同家も肥るの蓋を金こ伝者も

婦道のうるはしきよしをしるし
ものく簡題をつけ給ひ我子をひくらうに
ものとなる事を孔子の善言論語に記
給ふ色義の中小さきの
つきて服おのうるはしきあるを小来きりかを思ふ
をやきう人しかも愛ある心裏の理をもつてを他
我ものりの法を同世古日来使女人貧乏修養をを
思しまて婦金へ下善をは人こを諸文むりんれ
浅中なまやうて深せうきわとりくもつた
復小てうていのをたちてを完ゆうちやうれ

人ものもの世のそ里恋のはいさどをり我
ものりてがうえんのさをを及む寸ものの
はのものを石人のくふく倍所のぞ新亜
書きう七月七日今歌い家半織女の二星鳥鵲の
橋を渡して一年の情抱をとく歌ものを文人れ
ものそく竹年小移りひのいく我うけ遊およ新
つく祝くきこうでんを経すう歌ものを世
上ものもの我りふなを詩歌を書う鶴人
をのく愛絵をものもの伶倫ものを庵くり上
郎ものうは四雲雨を何とのく世中の乱きを雅

が身のよふ来らんをそうむとて高井を
をもて城ひやすはりみなまけ皆まを面をひそめ
面をうるさきてぞいをうる和いてく涙て雅うは
とを目をまけ岩田の中綱を奉ふをとてはおか
こうす直上屋をちうはけて伯ありをうい資料
俊基がとうつまし相東風殺いまを月うう
を中基常小あやうきをみむ山上小又いうう
さをうぬさんをらんとくえいまよ文小おやう
あうんいてを先をういを月むををちう
あくあうむと物問をけをて奉仕をうい

資料俊基が白状あり世取はいりをを武士山上の
さをよいはをちをとあひへを日東夷の行事
をうの乃紙はかくうをは油断をまをきゆくは
まを岩又一紙をうをされく和捜入乃がいるを
紙をがめはいをやとやさををれを自上げ小も
をや田石されをんさをもやうて奉ふけを伯
ありをを月は小おうて業業ををあをを憂
焼を表をうくえいらんをそはをうを乃岩又
小をうくとかを里をを紙は油ましををねぐ
りを法へをは小をはけう老をを嫌をを

まわいなりをりやうてまして乃小海の大綱云
宣房乃心を勅使とおそれ出給文を関東へ下さる
さうこ入乃秋田城介とりて出給文をうけとりてせく
刑部丞せんとおもきう城二階堂出羽乃入道乃籠
かくくいうめてゆきをうい天子武臣小さいして
出給文を下されさう事共国ゆを我物ゆを
いまのことをきいを取らす郎さうを取る城さう小掃部
せうまんるゆうやうきんと付てを出のりく
文給をひらかとおく勅使小ゆまりくせらる
をきかと御注申きうをはりくく入乃何うらる
うをきとて敵方乃ゆきとゆきふよ見
まいりさせられきうよ敵人偽りさう敵天乃
廻境よ但をとあそこされあう家をよくけう財
ふとゆさ儀よめくれるぢうけきをよく
ちそをおく廻かすその日より乃下小熱癌
ゆく廿日のうちふちをきて見小ゆり財ぎう
きふ及くるごうんよりわとりん見臣上下れ
れたぐふと紀いさすが佛神乃罰もをきりと見
をゆきう人くふをぢをそきれをるうり敷り
何さ函資物後春の懐懐えいまようおし事

なまけあるひ告文をくだされたりとゝ
りしようをうけたまはりて書國へうつ
ゝ
をくとゝもめい評定一きわたくけきとも勅使
宣房ハのゝさるゝをもひきげよりとゝ
上告文よりたゝりしゝゆきまいうふちをも紀
てゝたゝりきりよ法人うかちをまれはをとゞ
お撰へるもさすが天竜をたゝりありきりやゝ
は治世のは事い勅議よりまりせ事上い戦
いろひゝをきゝあゝすとく勅答をゝて告文を
ゝまいゝせらう宣房ハをるゝたゝ海ゝたくは

より養しゝされきりよゝそたんきんすゝめて
とけてゞんたん文をけうゞ戦されけきさう補よ
後醍勅ハいたゝのうゝけたきをうゝたくたて
しやめんせゝれをけとものゝたやう忠義一筋
をうゞめられゝ伯後の國へぞ流さきけり

大平記巻第一

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan